第２課　朽ちない財産

【暗唱聖句】

「あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい。」第一ペテロ1:22

真理を受け入れるようになると、わたしたちは全人格的に変わり始めます。その結果、魂が清まり、偽りのない兄弟（同じ信仰を持つ人）愛を抱くようになります。兄弟愛を抱くようになったのですから、今度は実際に愛を実行することが大切です。清い心で深く愛し合うことです。難しいと感じることがあったなら、初めの愛に立ち返ることです。まず真理に目を向けましょう。真理とは変わることのないものです。イエス・キリストはわたしが真理であると言われました。真理なる主を見つめ、学び、瞑想していくとき、不思議と魂が清らかになっていきます。その清らかな魂から愛が溢れ出てくるようになるのです。

【今週のテーマ】

今週はペテロは手紙に中で何を伝えたかったのかについて学びます。

【日曜日　離散している人たちへ】

当時の手紙の書きだしは、誰が、誰に対して書かれたものであるのかから始まります。

「イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たちへ」第一ペテロ1:1

まずこの手紙の送り主はペテロであることがわかります。ペテロは自分のことをキリストの使徒と表現することで自分が神様の召しを受け、キリストから遣わされたものであることを表明します。次に送り先が「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たち」となっています。これらの地域は現在のトルコにあたります。彼らは迫害を逃れてトルコまで来ていました。大変な状況にあることがわかりますが、ペテロは彼らを神様から選ばれた人たちと言っています。自分自身も神様から選ばれた使徒としての自覚があるだけでなく、同時に離散している人たちも神様から選ばれているのだと伝えることで、勇気づけ、励まそうとしているのがわかります。この手紙を読むわたしたちも同様です。神様から選ばれた者としていま生きているのです。この自覚が大切です。

この離散している人々がユダヤ人クリスチャンなのか、異邦人クリスチャンなのか、あるいはその両方なのかは諸説あるようです。ただ「離散」「仮住まい」という言葉は本来ユダヤ人に当てはまりますし、また手紙の中で異邦人という言葉を使ってあえてユダヤ人以外の人たちのことを呼んでいることから、ユダヤ人クリスチャンを中心に書かれたと考えるのが妥当と思われますが、文面から断定することは難しいようです。

【月曜日　選ばれた】

「あなたがたは、父である神があらかじめ立てられた御計画に基づいて、“霊”によって聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、また、その血を注ぎかけていただくために選ばれたのです」第一ペテロ1:2

神様に選ばれた人とはどういうことでしょう。その特徴について次のように書かれています。

①予め神様が立てられたご計画に基づいている。

②“霊”によって聖なる者とされている。

③イエス・キリストに従っている。

④キリストの血を注ぎかけていただいている。

主によって選ばれた者とは、本当に特別であることがわかります。ただ、選ばれるとは単に救われているか救われていないかを現しているわけではありません。神様の働きを遂行するために、霊に満たされ、キリストに従い、キリストの血によって赦しを受けている者たちのことを現しています。本来、神の子たちとはそういう人たちのことを指すのです。人類の救いに対する神様の御心は以下の聖句を読めば明らかです。

「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます」第１テモテ2:4

「ある人たちは遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」第二ペテロ3:9

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」ヨハネ3:16

「彼らに言いなさい。わたしは生きている、と主なる神は言われる。わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか」エゼキエル33:11

これらの聖句からわかることは何でしょうか。それは神様はすべての人が救われることを、一人も滅びないことを望んでおられるということです。主の思いはわたしたちの思いでもあります。一人でも多くの人が救われるようにと祈り、福音を述べ伝えることをおろそかにしないで生きるものでありたいと思います。主の思いと私たちの思い、あるいは生き方が一つとなるのがクリスチャンの究極の完成された姿なのです。しかし、そもそも人の救いの前に、自分自身は大丈夫でしょうか。愛する家族は大丈夫でしょうか。主は実は、私達自身のことを何より大切に思い、救いから漏れることのないようにと心配しておられるのかもしれません。

る意味、すべての人が救われるために選ばれ、救いに招かれているのです。ただ、その神様の選びや招きに対して人間は自由の意志を行使することができます。つまり拒むことができます。全能なる神様はそのことも予知することがおできになります。その意味において初めから選ばれている人たちがいるのです。なお、神様が予知していることがわたしたちの行動や意志決定に何らかの影響を与えることはありません。神様は単に予知しているのであって、そうなるように導いているわけではないからです。

【火曜日　鍵となる主題】

第一ペテロ1:3～12にかけて新共同訳では「生き生きとした希望」という題が付けられていますが、その中身は3～9節にかけて書かれてある父なる神様と御子キリストが、そして10～12節にかけて書かれている聖霊が、つまり三位一体の神様が、わたしたちにどれほど素晴らしい恵みと希望を与えてくださっているのかについて書かれてあります。

たとえば、「神様はわたしたちを新たに生まれさせて下さった」「キリストが復活されたことによって生き生きとした希望を与えられた」「天に蓄えられている財産を受け継ぐものとなった」など、次々に数々の驚くべき恵みや希望が列挙されます。この手紙を受け取った信徒たちの多くは、実際には多くの激しい試練の中にありました。しかし、その試練ですら、彼らの信仰が本物であることを証明することとなり、イエス・キリストが現れるときには称賛と光栄と誉れとをもたらすことになると言います。

この大いなる希望へと導く、神様の驚くべき恵みについては、過去の預言者たちも探求し、注意深く調べていたのだとペテロは言います。神の御子が救い主としてこの地上に来られる、これほど大きな関心事は他にはありません。だから、彼らはどの時代にそれが起こるのか調べたのです。やがて彼らは自分たちの時代には起こらないことを悟り、それは来るべき未来に起こることを知りますが、まさに彼らが調べたその大いなる恵みがいま自分たちが体験していることなのだとペテロをいうことで、信徒を励ましているわけです。

多くの預言者たちが見た再臨の光景についても同様のことが言えます。彼らはそれを見ました。しかし、自分たちの時代ではなく、未来において起こる出来事でした。救い主がまもなく戻って来られる、それは初臨の出来事に勝るとも劣らない出来事ですから、大いなる関心でありました。そして、それがいま間もなく起ころうとしている、そのような時代にわたしたちは生きていることを心に留めたいと思います。

【水曜日　救いの人生を送る】

「だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい」第一ペテロ1:13

ペテロは、わたしたちが主の多くの恵みと希望の中に生きているのだから、「いつも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい」と語ります。ここでのポイントは3つ、すなわち①いつも心を引き締めていること、②身を慎んでいること、③キリストを待ち望んでいることです。

「いつでも心を引き締め」とは、原文では、「あなたがたの心の腰に帯をしめ」です。帯を締めなければ服がはだけてきてだらしが無くなるように、心にもしっかり帯をしめ、しっかりしていなさいということです。「身を慎んで」とは、酒に酔っていない状態「しらふ」を指す言葉です。そして、キリストをひたすら待ち望むの「ひたすら」とは、「完全に」という言葉です。つまり「キリストがおいでになるという望みの確かさをしっかり持ち、 それから動くようなことがあってはならない」ということです。

加藤常昭牧師は次のように解説しています。「おそらく想像しますのに、当時の教会の人びとは、信仰者として一所懸命に生きていたと思います。しかし、当時のキリスト教会は、 今日のキリスト教会よりもずっと小さい教会でありました。その中で生きようとしても、絶えず勇気を失い、望みを失い、 しかもすでに抜け出てきたはずのむなしさの生活を、なお引きずって歩いているようなところがあったのであろうと思います。 むなしい生活の脱け殻みたいなものを引きずって、それと戦いながら、毎日、聖さの中へ今一歩踏み込んで行くような生活をするのです。 ペトロはそれをここで教え、励ましているのです。」

ペテロ第一1:14に「無知であったころの欲望に引きずられることなく」とあります。「いつでも心を引き締め、身を慎ん」でいなければ、元の生活に引き戻されてしまうのが人間です。しかし、この姿勢は、 自分の一生懸命さや努力によるものではありません。中心は自分ではなくキリストなのです。イエス・キリストを「待ち望む」ことに徹底することによって、元の生活の「むなしさ」にひきずられることなく、聖なる者として生きていくことが出来るのです。

ペテロがこのような生き方をするようにと語る背景には以下のことがあります。

①父なる神様が聖なる方だから。

「あなたがたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである」と書いてあるからです。（第一ペテロ1:16）

②自分の行いにしたがって裁かれるから。

「また、あなたがたは、人それぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を、「父」と呼びかけているのですから、この地上に仮住まいする間、その方を畏れて生活すべきです」（第一ペテロ1:17）

③キリストの血によって買い取られたのだから

「知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです」（第一ペテロ1:18、19）

【木曜日　互いに愛し合う】

「あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい」第一ペテロ1:22

身を慎んでキリストを待ち望むようにと言った後、次にぺテロは清い心で互いに愛し合うようにと言います。この教えの出発点は、すでにクリスチャンは真理を受け入れ魂が清められ、兄弟愛を抱くようになっているということです。だからその愛をさらに清い心で深めていきなさいと言うのです。これは聖霊が働く者同士の間にわきあがる自然なものです。逆に、兄弟愛にかけてしまうとき、魂の清さを失いかけているのかもしれません。それは真理から遠ざかっているからなのかもしれません。